様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０７２５

研究課題名（和文）日本人大学生の英文要約の評価に関する研究：分析的な評価尺度の開発と運用

研究課題名（英文）Developing an Analytic Rating Scale for L2 Summary Writing in the Japanese University Context

研究代表者
山西　博之（YAMANISHI, Hiroyuki）

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：３０４５２６８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、第二言語（L2）で書かれた文章を読み、その要点を対象言語でまとめる要約（Summary writing）を取り扱い、その中でも、評価―とりわけ評価尺度（Scoring rubric)―に焦点を当てた。研究I～研究IIIの一連の研究を行い、独自の分析的評価尺度である「L2要約用分析的評価尺度 / Analytic Rating Scale for L2 Summary Writing」を開発した。この評価尺度には、「内容 」「言い換え（質)」「言い換え（量)」「言語使用」、そして「全体的な要約の質」の5観点が含まれる。

研究成果の概要（英文）：　The overall purpose of our project is to provide an analytic rating scale for L2 summary writing in the Japanese university context. Although Educational Testing Service (ETS) has developed a holistic scale, it is hard to identify whether a writer merely failed in reading comprehension or had difficulty in writing even if he or she understood the passage.

We have found that using the ETS scale led to lower reliability among Japanese raters, who are English as a foreign language (EFL) teachers, than among native English raters in evaluating summaries written by Japanese university students. Therefore, we have developed an analytic rating scale that reflects opinions from the Japanese raters, after which experts in language testing were asked to join the expert judgment. This analytic scale has five aspects: content, paraphrase (quantity), paraphrase (quality) and language use, and overall quality.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育学

１．研究開始当初の背景

本研究では、第二言語（L2）で書かれた文章を読み、その要点を対象言語でまとめる要約（Summary writing）を取り扱う。要約に関する研究は、L2 で書かれた高度で知的な文章を読み、読解内容をその言語を用いて自分の言葉で簡潔に表現するという課題の要求の高さや、そのような課題遂行の必要性から、主に大学生や大学院生を対象として行われてきた。例えば、L2 の要約のストラテジー（方略）（Johns, 1985; Johns & Mayes, 1990; Yang & Shi, 2003）やパラフレーズの仕方（Keck, 2006）に焦点が当てられてきた。しかしながら、そのような研究の多くは海外において行われ、日本の大学で外国語として英語を学ぶ学習者を対象にした要約研究は少ない（c.f., Ohno, 2007; Ono, 2008）。そこで、本研究では、日本人大学生を対象として、英語による要約研究を実施する。

本研究においては、要約研究の中でも、評価―とりわけ評価尺度（Scoring rubric）―に焦点を当てる。なぜなら、要約の指導に関する研究の意義は、それぞれの教室環境によって異なり得るが、日本の大学英語教育での要約においてどのような下位技能がどの程度到達されるべきかを明示的に示す評価尺度に関する研究を行うことは、普遍性が高く意義があると考えられるためである。適切な評価尺度の存在は、それを利用した指導を可能にすると期待できる。また、先行研究において日本の大学英語教育での要約評価に相応しい評価尺度が開発されていないことも、大きな研究動機である。

２．研究の目的

日本人大学生の英語要約のための信頼性と妥当性の高い評価尺度を開発し、それを活用した指導の効果を検証する。具体的には、3 年間の研究期間において、以下の事柄を明らかにすることを目的とした。

(1) 日本人大学生が書く要約において、どのような要素（下位技能）が重要であるか明らかにする。

(2) 複数の下位技能からなる分析的（analytic）な評価尺度を開発し、それが尺度全体として要約能力を測定し得るものであるかという、評価尺度の構成概念妥当性を明らかにする。

(3) 日本人大学英語教員や英語母語話者を採点者として、開発した評価尺度を用いたパイロット調査を行い、評価尺度の採点のし易さやその信頼性を明らかにする。

(4) 要約指導の際に評価尺度を学生に明示的に示すことの効果を、実践に基づき明らかにする。

(5) 得られた成果を公表することで、評価尺度やそれを用いた実践の普遍・汎用性を明らかにする。

３．研究の方法

上記目的(1)～(5)を行うために、具体的には、以下の研究 I～研究 III に述べる方法をとった。

(1) 研究 I: 総合的評価尺度の信頼性・妥当性検証（Hijikata, Yamanishi, & Ono, 2011）

日本人教員 3 名が ETS（2002）の総合的評価尺度を用いて、日本人大学生 51 名の要約を評価し、その結果を量的・質的観点からまとめた。

(2) 研究 II: 分析的評価尺度に必要な項目の抽出と形式の決定（山西・大野・土方, 2012）

研究 I とは別の日本の大学で英語を教えている教員 3 名とイギリスの大学院で応用言語学を研究している英語母語話者 3 名の計 6 名が、研究 I で用いた要約を、総合的評価尺度を用いて評価した。同時に、評価尺度の改善点の指摘も依頼した。その際、各要約の評価困難度（3 段階: Easy, Moderate, Difficult）の判定とその理由、また評価全体のレトロスペクションの自由記述コメントを得た。

(3) 研究 III: 分析的評価尺度の開発と精緻化（Ono, Yamanishi, & Hijikata, 2013; 山西・土方・大野, 2013）

① 研究 II の結果および既存のライティングの分析的評価尺度（e.g., Jacobs, Zinkgraf, Wormuth, Hartfiel, & Hughey, 1981）を参照し、「内容（Content）」、「言い換え（Paraphrase）」、「構成（Organization）」、「語彙（Vocabulary）」、「言語（Language）」、「メカニックス（Mechanics）」、「長さ（Length）」の 7 観点からなる開発のベースとなる尺度を用意した。

② 本研究に従事する 3 名の研究者が、研究 II で評価が困難であった（Difficult の評価となった）16 篇の要約を、ベースとなる尺度を用いて再評価した。その評価結果の統計的な分析および評価におけるレトロスペクションに基づき、尺度の改善検討を行い、「内容（Content）」、「言い換え（質）（Paraphrase: Quality）」、「言い換え（量）（Paraphrase: Quantity）」、「言語使用（Language use）」の 4 観点から構成される暫定的な分析的尺度を開発した。

③ 開発された暫定的な分析的尺度について、日本の大学英語教育に豊富な経験を持ち、応用言語学のうち言語テスティングを専門とする 3 名の日本人研究者に「専門家の判断」による改善点の指摘を自由記述形式のコメントで依頼した。

④ ③ の結果を受け、修正版の分析的評価尺度を開発した。

⑤ 研究 II で Difficult と判定された要約 16 篇について、研究 II で採点を依頼した日本人教員 3 名と英語母語話者 3 名に ④の修正版分析的評価尺度を用いて、再度評価を依頼した。

⑥ ⑤ を受けて，修正版分析的評価尺度の信頼性を検討した。

⑦ 得られた修正版分析的評価尺度を「L2 要約用分析的評価尺度 / Analytic Rating Scale for L2 Summary Writing」として、公表した。

４．研究成果

これらの研究 I～研究 III の結果、以下の成果が得られた。

(1) 研究 I：

分析の結果、ETS の総合的尺度では、学習者がある得点を取ったとしても、何ができて何に躓いているのかを示すことが困難であることが量的データにおいても、質的データにおいても示された。

(2) 研究 II：

得られたデータから、今後開発する分析的尺度においては、(1) 言い換え (Paraphrase) に関して独立した観点を含むこと、(2) 何ができて，何ができないかを明確にするために Can-do 形式を取ること、が望ましいことが分かった。

(3) 研究 III：

① これまでの研究を経て開発された暫定的な分析的尺度は、「専門家の判断」に基づき改善された。

② 具体的には、記述子の修正が行われ、「全体的な要約の質（Overall Quality)」の追加が行われた。

③ 「全体的な要約の質」の観点を含めた場合、ETS の総合的尺度よりも高い採点者間信頼性が確認された（開発した分析的尺度のトータルα = .68、ETS の総合的尺度α = .59)。

④ ただし、評定者数を減らした場合の一般化可能性係数は十分とはいえず、今後は、「L2 要約用分析的評価尺度 / Analytic Rating Scale for L2 Summary Writing」を実際に用いた際の観点の解釈の補助、および評定者トレーニングの方法を検討していく余地がある。

(4) 今後の展望

今後の展望としては、実際にこの尺度を運用面で用いた際の以下の事柄に対する知見を得て、実践上の解決策を見いだすことである。

① 評価に先立つ指導の中で使用した際の効果（到達目標として、書き直しツールとして）を他の指導方法（たとえば添削やモデル提示）と比較する。

② 評価を補助するための手段（使用方法、評価例、モデル要約等）を用意する。

③ 評価を補助するための手段を用いて行った評定者トレーニング前後の信頼性等の変化を確認する。

④ 英文要約の様々な課題や目的における試用を経て、この尺度を基本とした、より specific な尺度のバリエーションを開発する。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計４件）

① Masumi ONO, Hiroyuki YAMANISHI, & Yuko HIJIKATA (2013年10月19日). Developing an analytic rating scale for L2 summary writing in the Japanese university context: A quantitative and qualitative examination. Symposium on Second Language Writing 2013, Shandong University, Jinan, China.

② 山西博之・土方裕子・大野真澄 (2013 年 8 月 10 日). 「日本人大学生が産出する英文要約を対象とする分析的評価尺度の開発：専門家の判断による精緻化」全国英語教育学会 第 39 回北海道研究大会 北海学園大学 北海道

③ 山西博之・大野真澄・土方裕子 (2012 年 8 月 8 日). 「日本人大学生の英文要約評価：分析的尺度開発のための基礎研究」全国英語教育学会 第 38 回愛知研究大会 愛知学院大学 愛知県

④ Yuko HIJIKATA, Hiroyuki YAMANISHI, & Masumi ONO (2011 年 6 月 9 日). The evaluation of L2 summary writing: Reliability of a holistic rubric. Symposium on Second Language Writing 2011, Howard International House, Taipei, Taiwan.

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
山西　博之（YAMANISHI, Hiroyuki）
関西大学・外国語学部・准教授
研究者番号：３０４５２６８４

(2)研究分担者
土方　裕子（HIJIKATA, Yuko）
東京理科大学・経営学部・講師
研究者番号：１０５４８３９０

大野　真澄（ONO, Masumi）
早稲田大学・オープン教育センター・助手
研究者番号：５０７０４６５７
（平成２５年度から研究分担者）

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：